

絵本の中のマイノリティ：幼児に対する福祉教育の教材としての可能性を求めて

著者	徳田 克己
著者別名	Tokuda Katsumi
雑誌名	視覚障害心理・教育研究
巻	10
ページ	15-21
発行年	1993-12-25
その他のタイトル	The Minority in Picture Books
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124844

絵本の中のマイノリティ

— 幼児に対する福祉教育の教材としての可能性を求めて —

筑波大学 徳田 克己

I はじめに

子どもの成長に果たす絵本の役割が極めて大きいことは疑う余地のないことであり、これまで絵本に関する数多くの実践的、理論的研究が多岐にわたる分野で行われてきた。幼児教育や家庭教育において、絵本は子どもの発達を保障するために欠かすことのできない存在であり、良い絵本の紹介や選び方について多くの書物、雑誌が出版されている（例えば、日本子どもの本研究会絵本研究部、1989；清水、1984、1985；全国学校図書館協議会、1993）。

わが国で出版される絵本は、高度な印刷技術や製本技術を背景としているために完成度が高く、世界的にも注目されている。しかし、「日本の絵本はイラストが上手でとてもレベルが高いが、内容面では、障害者や離婚家庭などの社会的問題が絵本の世界からシャットアウトされていることを強く感じる」という在日外国人の感想もある（ジュリア・カセム、1991）。確かに、アメリカ合衆国において出版されている絵本には、障害者、少数民族、難病やエイズなどの病気の人、高齢者などの社会的マイノリティが、主人公として、また背景として（ストーリーと関係のない通行人としてなど）登場することが多い。この傾向は絵本だけではなく、一般の書物やテレビドラマ・映画などにも共通していると言われている。国際障害者年日本推進協議会(1983)は、マスコミュニケーションにおいて「障害者を、家庭や職場、学校あるいは余暇を楽しむ場といったあらゆる場面で描くこと、障害者を主題とする作品だけでなく、マスメディアの作品の中に出てくる一員として、障害者を仲間に入れること」などを提言している。日本では最近になって、障害児や高齢者が主人公として取り上げられるようになったのが現状である。

筆者はこれまでに、障害児・者やエイズ感染者に関する理解教育についての一連の研究を行って

きた（徳田、1988、1990、1991、1992、1993）。その中で、好意的な態度と適切な認識の形成のためには、幼児期からの取り組みが不可欠であることを確認している。

方法論的にも、オーソリティの講義を聞く方法、障害児・者と直接接触する方法、映像を用いる方法、施設や学校の見学を行う方法、ボランティア活動に参加する方法、障害のシミュレーション体験法、読書による方法などのいくつかの方法を開発し、その態度変容効果を確認している。

本論文では、教育現場の指導者、保育者、母親が日常的に行っている方法である絵本の読み聞かせを用いて、社会的マイノリティに関する理解を促進するための福祉教育の方法論を検討してみたと考えた。

具体的には、以下のことについて検討を行った。

- ①日本児童図書出版協会の会員社を中心として、絵本を出版している出版社に対して、社会的マイノリティを題材にした、あるいはそれらが登場する絵本の実態調査を行なう。
- ②出版社から紹介のあった絵本を入手し、登場者や内容について、整理、要約する。
- ③今回取り上げる絵本の福祉教育の教材としての有効性を検討する。

II 方法

(1) 調査対象

絵本を出版している出版社29社に対して、社会的マイノリティが登場する絵本に関する調査を実施した。そのうち回答があったのは、あかね書房、秋書房、あすなる書房、アリス館、岩崎書店、旺文社、偕成社、学習研究社、佼成出版社、講談社、集英社、主婦と生活社、小学館、大日本絵画、童心社、農山漁村文化協会、ひさかたチャイルド、福音館書店、PHP研究所、富山房、文化出版局、文研出版、平凡社、ほるぷ出版、ポプラ社、祐学

社、リブリオ出版の27社であった。したがって回収率は93.1%となる。

(2) 調査内容と手続き

調査対象社に、以下の文書を送付し、調査を依頼した。

『私は「障害を持った人や高齢者、難治性の病気の人などの、社会の中のマイノリティの方々についての社会的啓蒙と福祉教育」に関して研究をしている者です。障害者や高齢者の理解促進のためには、子どもの頃からの教育が必要であると考え、福祉教育のための教材の整備をおこなっていかなくてはならないと感じています。そこで今回、福祉教育の教材として用いることができる「絵本」を調査し、いくつかの視点で分類・整理したリストを作成したいと考えております。

貴社においてご出版なさっている絵本の中で、障害児や障害者、高齢者、病気や怪我の人、外国人、貧困者などの日本社会におけるマイノリティの人が登場するものがございましたら、ぜひご紹介戴きたく思っております。ご紹介下さった絵本は、早速購入させて戴くつもりです。』

調査対象社から回答のあった絵本のリストにしたがって、それらすべてを発注したが、絶版、品切れ、増刷未定などのものが十数点あり、それらを除いた70点が入手できた。

(3) 調査期間

本調査は、1992年1月～1993年1月にかけて実施された。

III 結果

入手した70点の絵本のうち、幼児から小学校低学年の子どものための、社会的マイノリティの理解に役立つ教材として活用できる可能性のあるものを選択するために、筆者と筑波大学の学生3名（心身障害学専攻2名、児童文学専攻1名）の計4名がそれらの絵本を読み、おのおの福祉教育の教材として適切であると評価した本を挙げた。その結果、70点のうち51点がどの評価者にも共通して適切であると評価された。

その51点の絵本を登場人物の特徴によって分類した結果、「障害を持つ人や動物が登場する絵本」26点、「高齢者や年をとった動物が登場する絵本」13点、「病気・怪我の人や動物が登場する絵本」

6点、「まわりと異なる特徴を持っている動物が登場する絵本」6点となった。以下に、それらの本の簡単な内容を示す。

*障害を持つ人や動物が登場する絵本

このジャンルの絵本では、主人公自身や主人公と直接かかわる登場者が障害を持っている内容であるか、あるいは障害を持っている子どもの日常生活や学校生活の解説つき写真絵本が中心である。

障害種別では知的障害11点、肢体不自由7点、視覚障害7点、聴覚障害1点であった。中学生以上の一般人を対象にした福祉教育の観点からすると、visibleな障害である肢体不自由者（車いすを含む）や盲導犬・白杖を持つ視覚障害者は題材として取りあげられやすいが、一般の人の共通認識に乏しいと考えられる知的障害については教材の内容の選択や方法論の点で本格的な福祉教育的取り組みが困難なことが多い。今回の調査結果をみると、作者は限られているとはいえ、知的障害に関する絵本が最も多く、積極的な活用が期待できる。

また以下のリストの最初に挙げた、上肢障害児が主人公である『さっちゃんのまほうのて』は、約20万部が世に出ている実績のある絵本であり、新聞や雑誌等で紹介される機会も多い。実際にこの本を用いての障害理解教育が、障害児を受け入れて統合保育や統合教育をしている幼稚園、保育所、小学校において行われている。障害者に対する肯定的な態度の形成や好意的な方向への態度変容を促進するためには、そのメッセージの与え手は受け手と同じ社会的境遇にいることが重要であることが確認されているが（Altman, 1981；徳田, 1988）、その点についても『さっちゃんのまほうのて』をはじめとする今回リストアップした絵本の多くは、主人公が幼稚園児などの読み手と同じステータスを持つ子どもであり、福祉教育の教材として効果的であると考えられる。

『さっちゃんのまほうのて』製作 田畑精一・野辺明子・志沢小夜子

先天性四肢障害児父母の会／偕成社

先天的に右の手の指が欠損しているさっちゃん
が幼稚園で友達にからかわれ、幼稚園に行くのが

嫌になるが、母親や父親のかかわりによって、自分なりに右手のこを受け入れるようになって行く話。

『誰も知らない』作 灰谷健次郎・絵 長谷川集平／あかね書房

まりこという脳性マヒの子どもが町の中を歩きながら地域の人達とふれ合っていく話。

『ベトちゃんとドクちゃんからのてがみ』文 松谷みよ子・画 井口文秀／童心社

ベトとドクというベトナムの結合体児の分離手術までの話。戦争の悲惨さも表現。

『わたしたちのトビアス』編 セシリア＝スベドベリ 作 トビアスの姉妹 ヨルゲン カロリーナ ウルリーカ ヨハンナ 訳 山内清子／偕成社

『わたしたちのトビアス 大きくなる』編 ポー・スベドベリ 作 トビアスの兄弟 訳 ビヤネール多美子／偕成社

トビアスという障害児が生まれた家族の話。障害のある人も、ない人も一緒にいるのが当たり前であり、それによってお互いを良く知ることができるという内容。

『ボスがきた』文 馬島克美 絵 竹内雅輝 編 福井達雨／偕成社

犬のボスと知的障害のいちろうの話。ボスが死に、いちろうは死について考える。

『みんなみんなぼくのともだち』文 福井義人・編 福井達雨／偕成社

知的障害の施設で先生をしている両親を持ち、知的障害の子ども達と一緒に育ってきた義人（健常児）の話。

『うさぎぐみとこぐまぐみ』かこさとし心の本／ポプラ社

保育園で統合教育を受けるショウタというダウン症児の話。

『ほおずきならそ』作 大塚伸行／童心社

何を話しかけても笑うだけのヨーサクと村の子どもたちのふれあい。村人からヨーサクが賽銭泥棒のぬれぎぬをきせられ、ヨーサクはいなくなってしまう。

『雨のにおい屋の声』文 赤座憲久・絵 鈴木義治／小峰書店

盲目の子どもたちがまわりの世界を感じ取るう

とする内容。詩的。

『こわいことなんかにあらへん』編 福井達雨・絵 馬嶋克美／偕成社

統合教育を受けている、やよいという知的障害の子どもが「こわい」「きたない」といじめられるがある子どもがそれをかばう話。

『はしれムンシー！』編 福井達雨／偕成社

飼い主からじゃま者扱いされた子犬のムンシーが、知的障害の施設で子どもたちと一緒に暮らしていく話。

『5にんのぼく 5にんめのぼく』かこさとしのからだところのえほん10／農文協

これから車いす生活を送らなければならない幼稚園児の「ぼく」は、自分が5人いたら「ぼく」を手術してくれた先生のような偉い学者、サッカー選手、探検家、野球選手、優しい看護婦さんをお嫁にもらうだんなさんになりたいという話。

『あつおのぼうけん』作 田島征彦 吉村敬子／童心社

養護学校の四年生のあつおの冒険の話。仲良くなった友達（健常児）を助ける内容。

『おんぶ』作・絵 はらみちお／岩崎書店

イタチのタッチと歩くことができない友達の子の話。タッチもケンのように、いつもお母さんにおんぶされたいが、ケンが歩けないことを知り、自分が恥ずかしくなる。

『およげなかったかも』文 福井達雨・絵 止揚学園の子どもたち／偕成社

知的障害の施設である止揚学園の、鴨が好きなおひこという男の子の話。

『もうどうけん ドリーナ』監修 日紫喜均三

作 土田ヒロミ／福音書書店

盲導犬ドリーナが産まれて、訓練によって視覚障害者のために働くようになるまでを写真によってつづった写真絵本。カラー版。

『クイールはもうどう犬になった』文 こむせたまみ 写真 秋元良平／ひさかたチャイルド

盲導犬ドリーナが産まれて、訓練によって視覚障害者のために働くようになるまでを写真によってつづった写真絵本。白黒版。

『掌の中の宇宙—視覚障害児の学校生活から学ぶ—』編 西村陽平・成子良子 写真 西村陽平／偕成社

視覚障害児の学校生活の1コマを写真によってつづった写真集。子どもたちの生き生きとした様子が印象的である。白黒版。

『見たことないもの作ろう！一視覚障害児の作品から学ぶ』編 西村陽平／偕成社

視覚障害児が粘土を用いて作成した作品の写真集。子どもが真剣な表情をして作成する様子がよくわかる。白黒版。

『友だちたくさんできるかな？一全盲児かずくんのねがい』編・写真 ビヤネール多美子／偕成社

全盲児かずくんの幼稚園から8年間の統合保育、交流教育の記録写真集。白黒版。

『指で見る』文・写真 トーマス・ベリイマン 訳 ビヤネール多美子／偕成社

盲学校の子どもたちの学校生活をつづった写真集。盲人用時計などの視覚障害を補償する器具の紹介もある。白黒版。

『わたし、耳がきこえないの』文・写真 トーマス・ベリイマン 訳 石井登志子／偕成社

生まれつき聴覚障害を持つ6歳の少女カロリーナの学校生活、日常生活をつづった写真集。白黒版。

『なぜ、目をつぶるの？一このすばらしい愛と協力のきずな』文・写真 トーマス・ベリイマン 訳 ビヤネール多美子／偕成社

ストックホルムの障害児の訓練のための、リハビリテーションセンターでの子どもたちの機能訓練の様子をつづった写真集。白黒版。

『だれが わたしたちをわかってくれるの』文・写真 トーマス・ベリイマン 訳 ビヤネール多美子／偕成社

障害を持つふたりの幼い姉妹の日常生活をつづった写真集。子どもたちの明るい表情が印象的。白黒版。

『車いすのマティアス』文・写真 トーマス・ベリイマン 訳 ビヤネール多美子／偕成社

脳性マヒ児であり、視覚障害をあわせ持つマティアスの日常生活をつづった写真集。白黒版。

*高齢者や年をとった動物が登場する絵本

このジャンルの絵本は、高齢者に対する思いやりを求めるものと老人性痴呆に関する理解を求めるものに大別できる。どちらも、来たるべき高齢

化社会に備えて意識しておかなければならない内容である。登場人物によって分類すると、おばあさんが8点、おじいさんが5点であった。

『おばあちゃん』作 大森真貴乃／ほるぶ出版
働き者でしっかり者のおあばちゃんが怪我をきっかけに、痴呆となる話。家族の視点。

『ハーヨとおじいさん』作 与田準一・画 西巻茅子／童心社

子どもと高齢者のかかわり。話の中でおじいさんが倒れてしまう場面がある。

『おばあちゃんをすてちゃいやだ パキスタンのむかしばなしより』文 福井達雨 絵 馬嶋純子／偕成社

パキスタンの砂漠の小さな村の姥捨ての風習の話。役に立たない老人は遠くの砂漠に捨てるという父親に反発して、みんなで仲良く暮らすことが一番であることを訴えた孫。

『星のかけらの首かざり』作 木暮正夫・絵 遠藤てるよ／岩崎書店

夏休みにおばあちゃんのところに遊びに行ったミホとフキおばあちゃんの話。

『おばあちゃんのありがとう』作 ふりやかよこ／文研出版

大きな家の前にいつも黒い猫と一緒に立って外国の息子さんからの手紙を待っている、独り暮らしのおばあさんと近所のみなちゃんの話。

『ばあちゃんのなつやすみ』作・絵 梅田俊作、佳子／岩崎書店

東京から娘と孫がやってきて、おじいちゃん、おばあちゃんと楽しい時間を過ごす話。

『ねんねしたおばあちゃん』かこさとし心の本／ポプラ社

タミエがやさしいおばあちゃんに育てられていく話。突然おばあちゃんが倒れ、不帰の人となり、おばあちゃんのお葬式を出す。

『ばあちゃんのえんがわ』作・絵 野村たかあき／講談社

ばあちゃんの縁側で、家族や近所の人、動物がふれ合っている話。

『おじいちゃんのまち』作・絵 野村たかあき／講談社

おばあちゃんが亡くなってからもう一年もひとり暮らしをしているおじいちゃんに、一緒に暮ら

そうと誘う話。近所の人がおじいちゃんにいろいろと声をかけ、それを見た自分は「おじいちゃんはこの街では独りぼっちじゃないんだ」ということがわかった。

『がんばれゴロウ!』作 福田岩緒／文研出版

おじいさん犬のゴロウと「ぼく」の話。年若い者に対する思いやり。

『おばあちゃんの病気』作 森たかこ・絵 高田勲／岩崎書店

脳溢血で倒れ、半身不随になったおばあちゃんを看護する家族の話。現実的な対応がリアルに表現されている。

『花びら時計』作 やまなみけい・絵 こもりかおる／岩崎書店

小さな時計屋のおじいさんを、ねずみの親子、猫、うみがめ、ふくろう、花の妖精が順番に元気づける話。

『うん、なんとかしなくっちゃ!』作・絵 ふりやかよこ／岩崎書店

突然おばあさんが亡くなったおじいさんを元気づけようとがんばる猫のピンクの話。

* 病気・怪我の人や動物が登場する絵本

このジャンルの絵本は、病気や怪我の人に対する思いやりや筋ジストロフィー、白血病などの特定の病気に対する理解を求める内容である。

『びょうきじまん やまいくらべ』かこさとしのからだとこころのえほん2／農文協

六人の病気の子どもが老人ホームに花を届けに行く話。一人の子どもは進行性筋ジストロフィーであった。世の中には病気にかかっても、他人の事を考えたり、生きている間を大切に過ごそうと考えている人がいるという内容。

『おっばいさよならね』作 中島信子・絵 長谷川知子／童心社

とむとけんの仲良しな兄弟の母親が乳ガンになる話。

『ねこかもね』作 なかえよしお・絵 上野紀子／文研出版

のら猫と怪我をした鴨の話。猫に助けられた鴨がお礼をする。

『チャーリー・ブラウン なぜなんだい? ーともだちがおもい病気になったときー』作

チャールズ・M・シュルツ 訳 細谷亮太／岩崎書店

チャーリー・ブラウンの友達ジャニスという女の子が白血病で入院した。頭にすてきなピンクの帽子をかぶってジャニスが学校に戻ってきたが、いじめっ子がその帽子を取り上げると、彼女の頭の髪は一本もなかった。

『ふゆのくまさん』文 ルース・クラフト・絵 エリッフ・ブレッグバッド 訳 山田修治／アリス館

枯れ木の上のほうに引っかかっていた毛糸のくまの縫いぐるみを助けて、洋服を着せてクッションの上に座らせてあげた兄弟の話。

『がんとたたかう子どもたち』文・写真 トーマス・ベリイマン 訳 ビヤネール多美子／偕成社

血液のがんである白血病に侵されたふたりの子どもと両親の生活をつづった写真集。白黒版。

* まわりと異なる特徴を持っている動物が登場する絵本

このジャンルの絵本には、まわりと異なる特徴を持つためにいじめの対象になる動物が、努力によって、周囲に認められるといった内容が多く、それが寓話的に表現されている。「白い象」「つぎはぎ色の象」「黄色のクジラ」「白いラクダ」は、現実には、白子症、アザのある人、外国人などの外見的特徴を持つ人にあたる。

童話の「みにくいあひるの子」も同様であるが、この種のストーリーでは、まわりと異なる特徴を持っている存在がいじめの対象となっており、それを乗り越えるためには潜在的な能力や特性（みにくいあひるの子が本当は白鳥であること、白い象が優しい心を持っているということ、黄色のクジラがたいへんな努力をすること）が必要であるということを示唆している。この点に関しては、社会的マイノリティを「常に一生懸命努力し続けなくてはならない存在」ととらえているステレオタイプ的な考え方の影響があると言える。教材として利用する際にはこの点に十分に注意しなければならない。

『ぞうのむらのそんちょうさん』かこさとし 七色のおはなしえほん／偕成社

象の村の中のたった一頭の白い象の話。小さい頃はいじめられていたが、優しい心を持っていたので、大きくなって村長になった。

『かわいいいきいろのクジラちゃん』 かこさとし
心の本／ポプラ社

一頭だけ体の色が黄色のクジラの話。いじめられるが、がんばって生きていく内容。

『じろりじろり』文 ディビッド・マッキー・絵
原昌 / アリス館

黒い象と白い象が戦争したが、それらの子孫の象は灰色で、その後、みんな仲良く暮らしたという話。

『ぞうのエルマー』文・絵 ディビッド・マッキー
・訳 安西徹雄 / アリス館

『またまたぞうのエルマー』文・絵 ディビッド
・マッキー・訳 安西徹雄 / アリス館

ジャングルの象の群れの中に、他の象のような色ではなく、いろいろな色のつぎはぎだらけの子象エルマーがいた。そのことを悩んだエルマーが身体の色を染めるが、雨で色が流され、他の象に笑われる話。『またまた……』は、その続編。

『しろいらくだ』作・文・絵 佐川美代太郎 /
文研出版

昔、中央アジアの商人のキャラバンの中にいたユルングという歳をとった白いらくだの話。

IV まとめ

本稿では、幼児から小学校低学年の子どもに活用することができる福祉教育教材としての絵本の検討を行った。絵本には、マイノリティに対するエチケットや知識を直接的に読者に与えるものとマイノリティに関する事柄を寓話的に表したものがあつた。年齢の低い子どもにとっては、具体性のある直接的な内容の絵本とマイノリティに関する考え方が舐化する寓話的な絵本の両方が必要であると考えられる。ただしマイノリティには、特異な外見の特徴を持ち、またそれによって周囲の人が違和感や偏見を持つようになるケースがあるので、特に子どもの場合には母親や指導者はその特徴（例えば障害者の持つ障害部位）を隠そう、見せないようにしようとするのではなく、むしろ子どもの好奇心を満たすように、写真絵本を含めた視覚的な情報を与えることが必要であると思わ

れる。幼児期にそのような好奇心を持つことは当然であり、子どもにそのことの罪悪感を持たせないようにしたい。子どもに好奇心が満たされることは、生涯にわたるマイノリティに対する正しい認識が形成される第一歩となるのである（国際障害者年日本推進協議会, 1983 ; Langer et al., 1976）。

参考文献

- Altman, B. M. (1981) Studies of attitudes toward the handicapped : the need for a new direction, *Social Problems*, 28(3), 321 - 337.
- ジュリア・カセム (1991) 外国人のパパとママー遊び・子どものパートナー, *NHK育児カレンダー*, 平成3年9月号, 70-72.
- 菊地澄子 (1990) やさしさと出会う本, ぶどう社
- 国際障害者年日本推進協議会 (1983) 障害者に関する報道改善をめざして一國連セミナーによる勧告一, 日本障害者リハビリテーション協会
- Langer, E. J., Fiske, S., Taylor, S. E. and Chanowitz, B (1976) Stigma, staring and discomfort : A novel-stimulus hypothesis, *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 451 - 463.
- 守 一雄 (1992) 『ちびくろサンボ』と『チビクロさんぼ』, 日本読書学会第36回研究大会発表資料集, 12-17.
- 日本子どもの本研究会絵本研究部 (1989) えほん一子どものための500冊一, 一声社
- 清水美千子 (1984) 絵本の世界(1) 一幼稚園・保育園児のための100冊一, 明治図書
- 清水美千子 (1985) 絵本の世界(2) 一幼稚園・保育園児のための100冊一, 明治図書
- 徳田克己 (1988) 障害者に対する一般人の態度構造と態度変容に関する文献的研究, *東京成徳短期大学紀要*, 21, 63-74.
- 徳田克己 (1990) 視覚障害児・者に対する一般の人の態度を改善するための技法とその評価, *視覚障害心理・教育研究*, 7(1・2), 5-21.
- 徳田克己 (1991) 聴覚障害者に対する態度変容における映像法の効果, *筑波大学心身障害学*研究, 15(2), 1-9.

- 徳田克己（1992） 盲学校の文化祭見学によって 会福祉総説』第19章，学芸図書
視覚障害者に対する態度がいかに変容するか， 全国学校図書館協議会（1993） よい絵本 第17
弱視教育，29(4)，20-24. 回全国学校図書館協議会選定，全国学校図書館
徳田克己（1993） 福祉教育 佐藤泰正編著『社 協議会

SUMMARY

The purpose of this research was to clarify the realities of the social minorities appearing in picture books published in Japan. The investigation covered the 29 publishers publishing picture books. 27 of them responded. As a result, 70 picture books were listed. Among these 70, 51 were selected as adequate materials for the education of the public concerning social welfare. The 51 picture books were classified into : 26 books in which handicapped people or animals appear, 13 books in which people or animals of advanced age appear, 6 books in which sick or injured or animals appear, and 6 books in which animals that have different characteristics from others appear. The conclusion drawn was that it is necessary to provide picture books that offer concrete knowledge of minorities as well as allegorical picture books to low - aged children.